

「白い木馬」より

ブッ
シュ
・孝
子

秋

山里にきて

久しぶりに秋とめぐりあった

ごめんごめん

こんなところでひっそりと

お前はもう幾年も空しく私を待っていたんだね

一九七三・九・一一

人生

私はまだ若かった頃には

今年の一月二十七日に、二十八歳の短

い生涯を終えられたブッシュ(服部)孝子さんの詩集、「白い木馬」が出版されます。多分、この雑誌が届きますところには皆さんのお目にふれていると思います。

著者、ブッシュ孝子さんはお茶の水女子大学家政学部児童学科を卒業後大学院に進まれ、その後大学院生としてドイツに留学され、その時に出会ったヨハネス・ブッシュさんと結ばれました。日本人とドイツ人ということなどをこえた人間としてお互いに心から理解し合っている結びつきであったということは、この結婚が決してすんなりと運んだものではなく、殊に孝子さんの乳がんという病やまいを知った上でのものであったということも、この詩集を読まれた方は深い感動をもつて感じとられると思います。

たまたまこの詩集のこと、ブッシュ・孝子さんのことが新聞で報道され、よくあることながら、それがもとで少々大げ

自分の好きな人生を歩めるものと思っていた
意志と努力とその上にほんのちよっぴり才能があれば
運など向こうからとびこんでくるさ

あれから

長い時が流れて今の私は考えている

そんな人生が歩めるのは

ほんのわずかの幸福な人達と

ほんのわずかのおろか者達だと

みんなが歩みたくない人生を歩いている

それでも一生涯命歩いている

一九七三・九・一〇

さにジャーナリストティックにそれからそれへと伝えられました。孝子さんが生前心から尊敬し、「先生がこの世にいらっしやるから生きていられる」とまでいわれた周郷先生は、「孝子さんをジャーナリズムの犠牲にしたくない！この詩集の本当の意義はもっともと深いところにある、それを少しでもわかつてほしい」とおっしゃいました。

それで、縁もこくなつた五月末、ちょうど去年の同じころに孝子さんがヨハネスさんと一緒に訪ねられたという、秦野市渋沢の周郷先生のお宅へ、孝子さんのお母さんにいらしていただいて、先生と話していただきました。

山は春から夏へと移り変わる時で、杉木立の間の道はひんやりと冷たく暗く、その道をどんどん上って、大分行って、急に明るく開けたところがありました。アカシヤの切株があちこちにあつて、その根元からまた新しいアカシヤの枝が伸